

立休息所前諸御役人出迎有之手前にて開く、

一印信關帖之儀、最初休息所の持來、夫より棕栢之間に相通り候節、右之間床に可置事、尤對馬守家來差引可致事、

一書簡之輪玄關前右之方腰掛に之、三之門内にて臺居、書簡取出し候後、玄關前腰掛に之置、尤御小人目付致差引候事、

一兩使休息所の通申候程合見計、中官下官之輩、對馬守家來致差引別構饗應場に入置、退散之節も是又同様、對馬守家來取扱可申事、

一兩使休息所へ相通り候段、御目付兩上使に可申達事、

一兩使休息有之、棕栢間の相通し候て、宜節案内可申聞旨、對馬守の大目付并御目付より申談置、左右有之候は、棕栢之間の兩使相通し可申哉之段、兩上使へ相伺御案内次第相通し其段申達、對馬守を始役人銘々御行禮席に相廻候事、

但此節兩上使御目付案内にて九老之間に扣、對馬守同斷御目付者御行禮席に相廻候事、
一兩使棕栢間の通り候は、後座の着座之上官雲

之間に寄せ置、兩使御行禮場着座相濟、直に屏風仕切内に着座之儀、對馬守家來取扱可申事、

一御行禮中御用之ため、御目付方支配向座敷内手近之場所に見計、代々相詰可申事、

一兩使棕栢間の通り候以前獻上之御馬、對馬守家來取扱庭内塀重門内へ牽入置可申事、

一御徒目付壹人扇之間入側御立之邊に罷在、兩使棕栢之間より上段の出席相濟候而獻上之御馬庭上正面に牽出候様、對馬守家來に申談爲引出、夫より右御徒目付如最前扇之間入側に罷在、獻上物之儀申上濟にて、對馬守上上官上段之末東西に退候を、

曲尺に下段入側に罷在候御目付より御徒目付に及會釋候而、直に御徒目付より對馬守家來に及差圖御馬爲牽入、右相濟て御徒目付引候事、

一御行禮之間、警衛所、諸番所并中官入置候場所等、作法爲見廻御徒目付御小人目付一度爲見廻候事、

一御行禮相濟兩上使并諸御役人扣所の退、座を曲尺に、御徒目付御小人目付場所に出役場の相廻可申事、

一兩使棕栢之間より對馬守家來案内して休息所の退座見計、兩使退出之儀對馬守より大目付御目付に左右有之、諸御役人最前出迎之場所出送之、

但兩使往返共、人拂并朝鮮人供差引之儀者、對馬守家來兼而相心得制し方致し可申候事、

一朝鮮人馬場先橋邊罷過候、附人之儀對馬守家來に爲申談、申來次第兩上使供之分操出置宜旨、御徒目付申聞候は、其段御目付より申達、最前出迎之場所迄出送之、

一兩上使御退散相、濟掛り御役人一同引取候事、以上、小野某留書、

同月廿六日同所において、信使を饗應せしめ給ふ、兩使は廣間下段、上使小笠原忠徳、脇坂安董伴食たり、

文化八年五月廿六日、對馬守義質が邸に於て朝鮮人御饗應是日上使對馬守狩衣、大目付大紋、其外は修聘の日に同し、御料理の品は兩聘使へ、七五三、四つ目、五つ目、折三合、星物三つ、上使相伴なり、上上官へは、七五三、四つ目、五つ目、製述官、良醫、上判事、書記以上判事、押物判事、醫員、寫字官、書

員、軍官へ、七五三、其外は三汁、十一菜、下官以下は強飯、給仕は對馬家來是を勤素袍、上上官以下は長袴にてこれを勤む、山本兵筆記、

文化八年五月廿六日御饗應之次第、
一朝鮮之信使の宗對馬守屋敷に在いて御饗應被下候に付、上使小笠原大膳大夫、脇坂中務大輔自注、各并井上美濃守、林大學頭、柳生主膳正、大紋、各、遠山左衛門、佐野宇右衛門、村垣左太夫自注、各、對馬守屋敷に相越、

一朝鮮人客館より對馬守屋敷一之門迄、同人家來行列にて相從ふ、

一一之門外にて上官以下は下馬、上上官は二之門外坂下にて下駕、旗録之下官其外從者此處に止る、兩使は三之門外石壇にて下輿、

但三之門より玄關前迄薄緣敷之、
一二之門内外に對馬守家來兩使を出迎罷在、休息所迄家老自注、布、令案内、于時對馬守、狩衣、美濃守、大學頭、主膳正、左衛門、宇右衛門、左太夫は廊下西之方、兩長老は南之方に出迎、兩使と一揖之後、兩使は休息所東之方、對馬守兩長老は西之方に立並ひ相

互に一揖摩之兩使着座、何も退去、上上官は入頰東
 之方、上判事以下は次之間、次官小童は廊下に罷
 在、中官之輩は玄關前庭上に群居、
 一兩使休息在之、對馬守家老棕栢間を令案内、西之
 方に着座、上上官は綠頰北向に罷在、兩長老は扇之
 間入頰の出座、
 一廣間簾掛之、
 一美濃守、大學頭、主膳正廣間下段西之方に出座、
 左衛門、宇右衛門、左太夫者綠頰左右に着座、
 但御右筆儒者自注、各假布衣、西之入頰に罷在、
 一對馬守先立大膳大夫、中務大輔廣間上段西之方
 に出座、對馬守者下段諸役人之上に着座、
 但兩上使之家來布衣着之者、刀持共西之入頰に
 罷在、
 一對馬守上使之方を伺罷在、于時上使會釋在之、對
 馬守綠頰に相越し、兩使可差出旨上上官に申達之、
 一兩使出席上段東之方に立並ふ、大膳大夫、中務大
 輔座を立相互に二揖有之着座、上上官は下段東之
 間に出座、
 但兩使の相從ふ上上官之輩、後座に罷在、

一上使會釋有之、對馬守上段の上る、時上意可申渡
 旨申聞、對馬守上使之側に進む、于時今度來聘に付
 而御饗應被成下旨、上意之趣申渡、對馬守承之上上
 官を上段の呼申含之、上上官兩使の傳之、兩使御請
 之趣上上官を以て對馬守の申述之、對馬守上使の
 申傳畢而、對馬守上上官下段の復座、
 一大膳大夫、中務大輔并兩使座を立、相互に二揖有
 之、兩使休息所へ退去上上官從之、大膳大夫、中務大
 輔は對馬守先立裝束所の退去、諸役人役之、
 一右過而上段簾垂之、茵設之、
 一對馬守先立大膳大夫、中務大輔下段西之方に出
 座、對馬守は綠頰西之方、諸役人は西之張出に着
 座、對馬守家老の差圖有之家老令案内、兩使休息所
 より下段東之方に出座、大膳大夫、大輔座を立相互
 に二揖有之着座、
 但兩長老は扇之間入頰に出座、
 一御饗應、七五三、四つ目、五つ目之膳出之、
 但膳具白木具、給仕對馬守家來、素袍、
 盃 吸物 捨土器
 初獻 酌 加

正使給初、次大膳大夫、次副使、次中務大輔、
 吸物出、初之吸物に代、
 二獻 酌 加
 大膳大夫給初、次正使、次中務大輔、次副使、
 吸物出、二度目之吸物に代、
 盃臺 押 折物 星物
 三獻 酌 加
 副使給初、次中務大輔、次正使、次大膳大夫給納、
 銚子膳部等撤之、菓子茶出之、
 一右畢而、大膳大夫、中務大輔并兩使座を立相互に
 二揖有之、兩使は對馬守家老案内して棕栢間の退
 座、大膳大夫、中務大輔は對馬守先立裝束所の退
 出、請役人從之、
 一扇之間上上官御饗應、七五三、膳具白木具、給仕
 對馬守家來、自注、長袴、
 一休息所上判事製述官、醫良御饗應右同斷、自注、給仕長袴、
 一雲之間上上官御饗應、右同斷、
 一鶴之間次官、小童此席々に相殘分、饗應場にて頂
 戴之、
 一玄關にて中官の饅頭被下、下官は腰掛にて強

飯被下之、按するに、上官以下御饗應所繪圖の別帳に收む、併せ見るべし、○今省略す、
 一御饗應濟て上段簾卷之、茵撤之、
 一大膳大夫、中務大輔并諸役人且兩使上上官再廣
 間の出席、次第如最前、
 一兩使御饗應之御禮上上官を以對馬守の申述之、
 對馬守兩使の傳ふ、對馬守上上官下段の復座、
 一大膳大夫、中務大輔并兩使座を立相互に二揖有
 之、兩使は棕栢間の退く上上官從之、大膳大夫、中
 務大輔は對馬守先立裝束取の退去、諸役人從之、
 一對馬守、兩長老棕栢間を相越、兩使と相互に一揖
 有之、對馬守長老案内して兩使退出、相送面々如出
 迎之時、小野某留書、
 文化八年五月廿六日
 一對馬守於廣間、御饗應有之、正使、七五三、御料理、副使、右同斷、鳥臺、
 一上使副使も右、七五三、奈良臺、菓子共被下之、扇
 之間、上上官三人、七五三、鳥臺、押菓子、聘使休息上之間次之間
 同入頰にて一同に頂戴、上官二十三人、
 一右御料理、盛もの、奈良臺、鳥臺は先達而之通、頂
 戴被仰付、

一兩上使、御膳部は銘々旅宿の御目付差圖之上相下、兩使御料理御扣一通りは、岩千代に被下之儀相願候に付、是又被下に相成、御饗應所に而次官十五人、小童七人、三汁十一菜、同、中官百三十人、米饅頭三つ、同、下官百十二人、切強飯七切つ、
 一兩上使狩衣、
 一岩千代同、
 一御役人大紋、布衣、支配向、前同斷、
 一朝鮮人聘使兩人者烏紗帽、黒團領、上上官烏紗帽青絲其上前同斷、近藤某留書、

通航一覽卷之八十六終

山田安榮
 伊藤千可良校
 門傳正興

通航一覽第二終

大正元年九月廿五日印刷
 大正元年九月三十日發行

(通航一覽第二奧附)
 非賣品



編輯者

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
 國書刊行會代表者
 早川純三郎

印刷者

東京市芝區櫻田和泉町七番地
 高宗啓藏

印刷所

東京市芝區櫻田和泉町七番地
 國書刊行會第二工場

發行所

東京市京橋區新榮町五丁目三番地
 國書刊行會

終